

2.1 ベクトル空間

定義 2.1 : ある集合 V が 実ベクトル空間 であるためには, その集合にて以下の条件を満たすベクトル和とベクトルのスカラー (実数) 積が定義されていなければならない.

ベクトル和

$\forall a, b, c \in V,$

(i) $a + b = b + a$ (交換則)

(ii) $(a + b) + c = a + (b + c)$ (結合則)

(iii) $a + 0 = a$ となる零ベクトル $0 \in V$ が存在する. (零ベクトルの存在)

(iv) $a + \bar{a} = 0$ となる逆元 $\bar{a} \in V$ が存在する. (逆元の存在)

スカラー (実数) 積

$\forall a, b \in V, \forall \alpha, \beta \in \mathbb{R},$

(v) $(\alpha\beta)a = \alpha(\beta a)$ (スカラー積の結合則)

(vi) $(\alpha + \beta)a = \alpha a + \beta a$ (スカラーの分配則)

(vii) $\alpha(a + b) = \alpha a + \alpha b$ (ベクトルの分配則)

(viii) $1a = a$ ($\mathbb{R}$ の単位元 1 とのスカラー積)

例 : $\mathbb{R}^n, \mathbb{R}^{n \times m}, \mathbb{R}[x], f(x) = Ax, \mathcal{C}[0, 1]$ など.

定義 2.2 : ベクトル空間 V の任意のベクトル $a_1, a_2, \dots, a_k$ とスカラー $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_k \in \mathbb{R}$ を用いて新たに定義するベクトル $\sum_{i=1}^k \alpha_i a_i$ をベクトル $a_1, a_2, \dots, a_k$ の 線形結合 (もしくは 一次結合) と呼ぶ.

よって, $a_1, a_2, \dots, a_k$ の線形結合はそのベクトル空間に属する.

2.2 部分空間

定義 2.3 : ベクトル空間 V の空でない部分集合 W が, V における和とスカラー積の演算によってベクトル空間になるとき, W を V の (ベクトル) 部分空間 という.

定理 2.4 : ベクトル空間 V の空でない部分集合 W が部分空間であるための必要十分条件は

(i) $W \neq \emptyset$

(ii) $\forall a, b \in W \Rightarrow a + b \in W$

(iii) $\forall a \in W, \forall \alpha \in \mathbb{R} \Rightarrow \alpha a \in W$.

例 : ベクトル空間 $\mathbb{R}^n$ に対して $\{0\} \times \mathbb{R}^{n-1}$ (原点を通る) 超平面など.

2.3 ベクトルの線形独立性と線形従属性

定義 2.5 : $a_1, a_2, \dots, a_k \in V$ が 線形従属 (もしくは一次従属) であるとは少なくとも 1 つ要素が 0 でない $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_k \in \mathbb{R}$ が存在し, $\sum_{i=1}^k \alpha_i a_i = 0$ が成立することをいう.

定義 2.6 : $a_1, a_2, \dots, a_k \in V$ が 線形独立 (もしくは一次独立) であるとは $\sum_{i=1}^k \alpha_i a_i = 0$ を満たす $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_k$ がすべて 0 であることをいう.

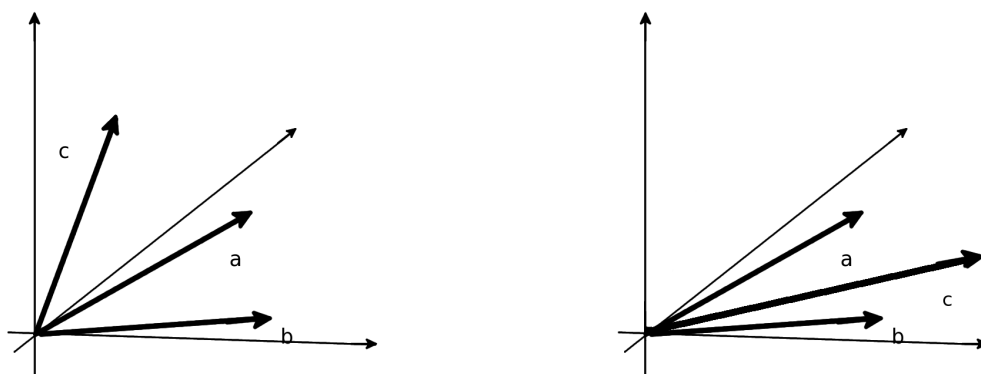


図 4: 3次元空間における線形独立なベクトル (左) と線形従属なベクトル (右) .

[問題 02-01] 以下の命題を証明せよ .

$a_1, a_2, \dots, a_m \in \mathbb{R}^n$ が線形従属である

$\Updownarrow$

$a_1, a_2, \dots, a_m$ の少なくとも 1 つが残りの $m - 1$ 個のベクトルの線形結合として表される .

2.4 ノルム

一般的にノルムの定義は次のようになる .

定義 2.7 : 実数ベクトル空間 V において, 実関数 $\|\cdot\| : V \rightarrow \mathbb{R}$ が定められていて次の性質を満たす時, この関数を ノルム と呼ぶ .

$\forall a, b \in V, \forall \alpha \in \mathbb{R},$

(i) $\|a\| \geq 0$

(ii) $\|a\| = 0$ である必要十分条件は $a = 0$

(ii) $\|\alpha a\| = |\alpha| \|a\|$

(iv) $\|a + b\| \leq \|a\| + \|b\|$.

[問題 02-02] $a_1, a_2, \dots, a_m \in \mathbb{R}^n$ とする .

(i) $a_1, a_2, \dots, a_m$ が線形独立であることの定義を述べよ .

(ii) $a_1, a_2, \dots, a_m$ が条件

$$\|a_i\| \neq 0 \quad (i = 1, 2, \dots, m) \quad \text{および} \quad (a_i)^T a_j = 0 \quad (i \neq j)$$

を満たせば, $a_1, a_2, \dots, a_m$ は線形独立であることを, (i) の線形独立の定義に基づいて示せ .

2.4.1 ベクトルノルム

一般的に, $x \in \mathbb{R}^n$ が与えられたとき, このベクトルに対するノルムを $\|x\| = \sqrt{x^T x}$ 以外にも定義することができる . それらの代表的なものに次のものがある .

$$\begin{aligned} \|x\|_1 &:= \sum_{i=1}^n |x_i|, & (1\text{-ノルム}) \\ \|x\|_2 &:= \sqrt{x^T x}, & (\text{Euclid ノルム}) \\ \|x\|_\infty &:= \max_{i=1,2,\dots,n} |x_i|, & (\text{無限大ノルム}) \\ \|x\|_p &:= \left(\sum_{i=1}^n |x_i|^p \right)^{\frac{1}{p}}, \quad (1 \leq p < \infty). & (p\text{-ノルム}) \end{aligned}$$

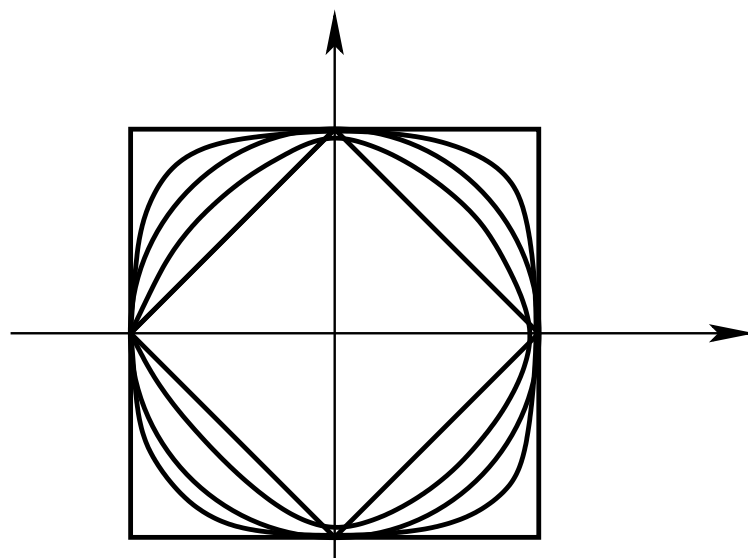


図 5: $\|x\|_p = 1$ となるベクトル (点) を表した図 ($1 \leq p \leq \infty$) .

2.4.2 行列ノルム

同様に $m \times n$ 次元実行列 A に対してもノルムを定義できる .

$$\|A\|_p := \left(\sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^n |a_{ij}|^p \right)^{\frac{1}{p}}, \quad (1 \leq p < \infty) \quad (\text{Hölder ノルム})$$

$$\|A\|_F := \left(\sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^n a_{ij}^2 \right)^{\frac{1}{2}}. \quad (\text{Frobenius もしくは Hilbert-Schmidt ノルム})$$

2.4.3 誘導された (行列) ノルム

$\mathbb{R}^m$ と $\mathbb{R}^n$ におけるノルムを選択することによって, $m \times n$ 次元実行列 A に対してもノルムを定義できる.

$$\|A\|_{(m,n)} := \sup_{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n, \mathbf{x} \neq \mathbf{0}} \frac{\|A\mathbf{x}\|_{(m)}}{\|\mathbf{x}\|_{(n)}} = \max_{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n, \|\mathbf{x}\|_{(n)}=1} \|A\mathbf{x}\|_{(m)}.$$

この場合, 次のような 誘導されたノルム が定義できる.

$$\begin{aligned} \|A\|_1 &:= \max_{1 \leq j \leq n} \sum_{i=1}^m |a_{ij}|, \quad (1\text{-ノルム}) \\ \|A\|_2 &:= \sigma_{\max}(A), \quad (\text{スペクトルノルム}) \\ \|A\|_{\infty} &:= \max_{1 \leq i \leq m} \sum_{j=1}^n |a_{ij}|. \quad (\text{無限大ノルム}) \end{aligned}$$

ただし, $\sigma_{\max}(A)$ は行列 A の最大特異値を表す. A が正方の場合, $\sigma_{\max}(A)$ は $A^T A$ の最大固有値の平方根を表す.

例:

$\begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 0 & 2 \end{pmatrix}$ に対して, $\|A\|_F = 3$, $\|A\|_1 = 4$, $\|A\|_2 \approx 2.9208$, $\|A\|_{\infty} = 3$.

2.5 内積

2つのベクトル $\mathbf{a} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ \vdots \\ a_n \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^n$ と $\mathbf{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^n$ の 内積 は

$$\mathbf{a}^T \mathbf{b} = \sum_{i=1}^n a_i b_i$$

として定義される.

一般的にあるベクトル空間 V において定義される内積は次のようになっている.